

忘れがたい刻印

栗原 祐幸

大平総理が亡くなった当座、思い出すと涙が出てこまった。悲しいとか淋しいというより、こみあげてくる虚しさである。こんな経験は初めてである。今までも多くの知己、朋友、先輩とお付き合いを願ったが、大平さんほど思いの残る人はない。

私は、昭和四十七年十一月、参議院から衆議院に転向するにあたり、当時の田中総理と河野参議院議長との話で、大平派に入れてもらうことになった。そういつては恐縮であるが、別に大平さんの人格や識見を熟知し、憧れをもって入ったわけではない。いふなれば全くの時の偶然である。

しかし、一旦身近に接するにつれ、その存在の大きさにだんだん魅せられるようになった。大平さんは誠実で、愛情にあふれ、時には底抜けの無邪気ささえ感じられた。しかも長年の思索や読書に裏打ちされた人生経験はドカツとした重心と権威とを形成し、人の心を大きく惹きつけずにはおかなかった。特に私とはうまが合ったのか、いいたいことをいわしてもらったし、また可愛がってもらいだいた。

あれは確か昭和五十二年、福田内閣ができて大平さんが幹事長になった直後である。時あたかも伯仲国会で予算修正が最大の課題であった。ある日、大平さんから電話で「栗原、今晚、俺と付き合え。これから会館に迎えに行くから」という。大平さんの車に乗せてもらい着いたところは築地の古河寮である。狭い階段を上ると、そこに日銀総裁や輪銀総裁、専売公社総裁等大蔵省のOBと現役の次官、局長がたむろしていた。

大平さんは「今日は珍しい人を連れてきた。皆さんよろしく」といつて私を紹介した。食事のあと、次官や主計局長等と一緒に私を別室にさそい、そこで予算修正の話をしたのである。

こうしたことは全く珍しいとのこと、当日OBの世話人として出席した村山達雄君も驚いていた。しかも帰りには、わざわざ九段の宿舍まで送ってくれ、そのうえ私の部屋までくるという。私が「おとうちゃん、気がきかない。いい人が待っているんです」と冗談をいうと、「そうか」と笑って帰って行かれた。あの時の姿が今でも脳裡に強く焼き付いている。

また、昭和五十四年、労働大臣として先進国労相会議で渡米した際、帰途ロスアンゼルス総領事館で、たまたま大平さんや東郷大使と一緒に食事をすることになった。東郷大使が「総理はよく書物を読まれますな。ニューヨークでも本屋に立ち寄られて」と話しかけると、大平さんも「君もなかなかよくものを書くね」とまずはエールの交換があつた。しかし、東郷大使は私にわるいと思つたのか、「労働大臣は、どんなものを読まれますか」と話しかけてきた。私が「本は余り読まない」と答えると、大平さんはすかさず、「では君は何をするのかね」と尋ねた。私が「本は読まぬし物も書かないが、よくものを考える」とこたえようと、大平さんは「それでは君が一番偉いことになるではないか」と、さも面白そうに大笑いをされた。今から考えると、とんだ失礼をしたと思うが、非礼のすべてを許していただいた大平さんに今更のように追慕の念を禁じえない。

大平さんは、今、昇天してどんな感慨だろう。それはわれわれの知る由もない。しかし、大平さんの余韻は、そこに残っている。彼が福田内閣の幹事長として陣どつた自民党の幹事長室にも、大蔵大臣としてすわつた大蔵省にも、そして時々遊びにこられた拙宅にも、かずかずの思い出が残っている。おそらく、大平さんに接した人々の胸に、忘れがたい温かい刻印を長く永く、残すのではあるまいか。(衆議院議員・第一次大平内閣労働大臣)